

縄文文化の 装身具①

—市内遺跡から出土した縄文中期頃の石製品—

縄文文化には、首飾り・耳飾り・腕輪・櫛などいろいろな装身具があります。石狩市内の縄文遺跡でも、これまでに垂飾や玉類などの装身具が出土しました。

写真1と2は、石狩紅葉山49号遺跡から出土した装身具で、縄文中期頃（約5千年～4千年前）とみられます。

写真1は琥珀製の垂飾です。透明感のある濃い赤褐色で、丸みのある三角形をしています。上方には孔が貫通し、ペンダントなどに用いたと考えられます。琥珀の原産地については諸説ありますが、この遺跡では小さな琥珀の原石も数多く出土しており、内陸（三笠など）の炭田地帯にある石炭層が川に削られ、その中に含まれる琥珀が下流や河口まで流されてきたのかもしれない。当時の人々がそれらを採集して装身具の素材に利用した可能性があります。

写真2は、玦状耳飾と呼ばれる石製装身具です。淡い緑灰色で（櫛岩か？）、扁平に磨いて仕上げられています。この出土品は約半分が失われていますが、他の遺跡から出土した類例から、もとは復元図のよう平面が三角形で中央部にスリット

の入った形と考えられます。北海道では、これまでの出土品から三角形の玦状耳飾が縄文前期末葉から中期初頭頃にみられることが知られています。

写真2の玦状耳飾には、小さな孔が2カ所に開けられています。上の孔(a)は割れています。その位置から破損した耳飾りをつなぎ合わせるための補修孔の可能性が考えられます。一方、下の孔(b)は、その位置から補修孔ではなさそうです。耳飾りに何か装飾を付けるための小

孔でしょうか。あるいは、上の補修孔(a)が割れて耳飾りとして使えなくなつたため、新たに孔(b)を開けて別の装身具として再利用した可能性もありそうです。

これらの装身具を見ると、形や色に当時の人々の美意識が感じられ、数千年の時を経た現代の我々をも魅了します。（荒山千恵）

※「玦」は古代中国の軟玉製の装身具の一種で、ドーナツ状の一部に切れ目の入った形をしています。この形に似た石製品が日本列島の縄文遺跡で出土しており、「玦状耳飾」の名称で呼ばれています。

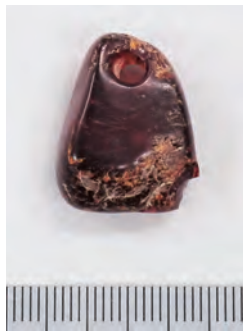


写真1 琥珀製垂飾
(縦の長さ2.2cm、厚さ 約1cm)



写真2 玦状耳飾(裏側より撮影)
(現存部の横幅約3.3cm、厚さ約0.4cm)



石狩市学芸員
荒山千恵 Chie Arayama

専門分野は考古学。遺跡の発掘調査をはじめ、出土した木の道具、音の考古学などの研究を行う。